

第35回日本乾癬学会学術大会 を終えて

(2020年9月12・13日, Web開催)

山本 俊幸

福島県立医科大学皮膚科学教授

はじめに

2020年9月12, 13日の両日にかけて, 第35回日本乾癬学会学術大会がWeb開催されました. もともと東京オリンピックの開催年に合わせて, 本学会のテーマも「乾癬オリンピック」としましたが(図1), 新型コロナウイルス感染拡大により「乾癬オリンピック延期」, 「乾癬オリンピック中止」となりそうでした. 収束とはほど遠い状況の中, なんとか現地開催も取り入れたハイブリッド開催の方向で準備を進め, 会場は当初よりもさらに広く借り, 席の間隔を広く空け, 参加人数も制限するなど考慮してきました. しかしWeb開催に踏み切るかを決める

タイムリミットの時点でも感染者数はさらに増大し, さらに夏本番を迎え県を跨いでの移動が予定されているなど, 感染者が減る要素は期待薄の状況でした. 乾癬学会は, 若手から年配の先生まで多くの層の方々が大勢集う学会です. 福島まで長距離を移動してこられる先生も少なくないので不安な要素が拭えませんが, 参加者の方に感染が生じる事態は避けなくてははいけません. 現地開催に関してはさまざまなご意見があり, 現地開催して欲しいという意見もあれば, 本当にやるのかという苦情まがいの問い合わせも事務局にあったようで, それぞれの方の住んでいる地域によっても差があります. さらに, 最悪の場合, 会場の公的施設が貸してくれなくなる可能性も考えなければならず, いろいろ考え悩んだ結果, 苦渋の決断で全面Web開催としましたが, この決断がよかったのかどうか今もわかりません.

本大会の概要

1. 会長講演

会長講演は例年必ずあるわけではないのですが, 今回2020年9月に私が学会を担当させていただき, そしてちょうど丸20年前の2000年9月に, 金子史男名誉教授が大会長を務められました. そこで, 会長講演に引き続いて, 20年前の会長を務められた金子先生にもご講演をお願いしました. 講演時間はわずかでしたが, その20年間の進歩を感じていただくことができれば望外の喜びです. 私自身の話としては, これまで自分が乾癬・掌蹠膿疱症にどう向き合ってきたかを振り返ってお話しさせていただきました. とくに現在第一線で頑張っている若



図1 今年の乾癬学会のポスター

手～中堅層の先生方にとって、何かを伝えられたらという思いでやりました。

II. 招聘講演

ドイツのMichael P. Schön先生に自然免疫・獲得免疫の観点からご講演をお願いすることができましたが、来日が不可となり、Web講演を了承いただきました。ところが8月下旬にメールがあり、ご家族にご不幸があり、スライド作成にあてようと考えていた時間がとれなくなったということで急遽キャンセルとなりました。

III. 教育講演

乾癬とアトピー性皮膚炎について、山崎小百合先生にご講演をいただいた後、引き続き関連演題を配置しました。

IV. シンポジウム

当初、乾癬オリンピックというテーマにちなんで、いくつかの国から、それぞれの国の乾癬事情(たとえば日本で使われていない薬など)をご紹介いただくと思ったのですが、ガイドラインを話されても面白くないのでやめました。代わりに、以下のシンポジウムを企画しました。

シンポジウム1「乾癬研究のトレンドを探る」

病態に関する研究の最近のトピックスをご紹介いただきました。イミキモドを用いた乾癬モデルマウスについてのオーバービューは、これから研究を始めようとする若手にもたいへん有益だと思います。乾癬性関節炎に関しては、国内外の先生に講演依頼をしたのですがご都合が合わなかったりレスポンスがなかったりしたため、自分で担当させていただくこととしました。

シンポジウム2「若手教育セミナー」

毎年ヤンセンファーマ株式会社に、J-PEARLSを企画していただいています。今回は、若手教育を主眼とし、例年より時間も延長しました。前半をJ-PEARLSが企画、後半を「あなたの疑問に答えます」と題して、ほかではあまり聞けないテーマをこちらで設定しました。J-PEARLSの内容は若手教育セミナーですが、後半は若手対象の内容ではなくってしまいました。

シンポジウム3「Asian Psoriasis Forum：乾癬・PPPの考え方は東アジアで同じか？」

掌蹠膿疱症(palmoplantar pustulosis：PPP)につ

いての東アジアの国の考え方を聞く企画を考えました。掌蹠膿疱症は日本に多い疾患といわれますが、他のアジア諸国ではどうなのか、また日本では乾癬と区別し独立した疾患と考えられていますが、東アジアではどうなのか。さらに、掌蹠膿疱症性骨関節炎にしてもSAPHO症候群とは分けて私自身は考えていますが、海外では異なる考えの立場も多いです。このあたりの考えを聞くべく、共通した質問をあらかじめ送り、当日の講演でそれに答えてもらう形式を考えていました。しかしこちらも残念ながら来日は困難となってしまい、録画でのご講演にご協力いただけたお1人の講演となりましたが、なぜか内容はPPPとは違っており、乾癬と妊娠みたいな感じになっていました。聞きたい内容(表)をあらかじめ送っておいたはずなのですが、こちらの意図がうまく伝わらなかったようです。今回、韓国、中国、台湾の先生方に趣旨を伝えましたが、適任者を探すのもむずかしく、他の国では私たちが思うほど、両者を意識して区別していないのではないかともしました。たとえば韓国乾癬学会の疫学調査をみると、PPPが含まれていますが、日本では、乾癬の登録調査票にPPPは入れていません。調査項目も、乾癬に対してのものがそのままPPPにあてはまるとも思えません。また、最近の中国からの論文(Li C, et al：JAMA Dermatol, 2020)をみると、掌蹠膿疱症性骨関節炎をSAPHO症候群

表 乾癬、掌蹠膿疱症の考え方についての質問項目

Questions to Asian Dermatologists
1 : Is palmoplantar pustulosis a distinct entity or acral variant of pustular psoriasis? How do the dermatologists in your country consider?
2 : Do you use the term palmoplantar pustular psoriasis?
3 : What do you think the difference between palmoplantar pustulosis and palmoplantar pustular psoriasis?
4 : Do you include palmoplantar pustulosis patients in the psoriasis registration survey in your country?
5 : Do you think that co-existence of psoriasis and palmoplantar pustulosis is often or rarely observed?

として考えています。ですので、他の東アジアの皮膚科医は、乾癬と掌蹠膿疱症を皮膚症状、関節症状を含めて、あまりこだわりをもってみていないのかもしれません。

シンポジウム4「患者さんの本音に迫る ～教科書よりも目の前の患者さんから多くのことを～」

患者さんは生きた教科書とよくいわれます。私自身、多くのことを教わってきました。ただ、通常の診察範囲内ではどうしても1人あたりに時間を割けなく、ゆっくりと話を聞けないのが実情です。本シンポジウムでは患者会とのつながりが強い先生方に座長をお願いし、演者が患者さん、聴衆が皮膚科医という、通常スタイルと逆の構成にしてみました。出会った医師から、「乾癬が治らないといわれたことが辛かった」と皆さんおっしゃっていました。いきなりこちら側からこの病気は治らないということではなく、話の流れで「治りますか」という質問に対しての返答なのでしょうが、言葉の選び方に注意したいものです。

シンポジウム5「今どきの専門外来事情 ～専門外来から学んだこと～」

これは現在第一線で、大学の専門外来(そういう名前の枠でなくてもいいのですが)を担当されている中堅(orベテラン)の先生に、乾癬外来から学んだこと、自分なりに考えたことを自由にお話いただきました。全国の施設で、実際に乾癬外来を担当している若手の先生に、参考にさせていただけたらと思います。

シンポジウム6「実地医家のための乾癬治療Update～バイオに頼らなくてもここまでできる～」

バイオ製剤が花盛りですが、もちろんすべての患者さんに適応になるわけではありませんし、すべての施設でバイオ製剤を使用できるわけでもありません。またバイオ製剤を使用できる施設でも、ほかの治療法で治療にあたっているのが大部分です。バイオ製剤以外にも新規治療法が出てきているので、それらを駆使しての乾癬治療をお話いただきました。

シンポジウム7「乾癬と膠原病」

乾癬の病態は膠原病と共通する機序も多く、その病態を考えるうえで、お互いにヒントになりうるものです。全身性エリテマトーデス、全身性強皮症、皮膚筋炎を取り上げ、それぞれのエキスパート

の先生方に解説いただきました。

V. JSPR-IPC Joint Symposium[Personalised medicine in psoriasis]

International Psoriasis Council(IPC)との合同シンポジウムを企画しました。海外演者の先生は2人とも録画でのご講演で参加していただきました。とくにKerkhof先生はとても熱心な先生で、質問が出たときのために現地時間が夜中でもスタンバイしてくれと申し出てくださいました(大丈夫ですとお断りしましたが)。

VI. ディベートワークショップ

乾癬/掌蹠膿疱症を巡って、両疾患の異同、掌蹠外病変の考え方、小児発症、関節炎などを相反する2つの側面から述べていただき、いろいろな考え方があるのを紹介しました。例によって時間は押しましたが、Web学会なのでそのまま後ろにずれていけばよいと勝手に考えていたところ、スポンサーセミナーは時間通りに始めないといけないようで、配信会社のディレクターみたいな人が焦っていました。

VII. 特別企画

これまで長いこと乾癬診療に従事してこられた大御所の先生方に「忘れえぬ乾癬症例」と題してお話いただきました。お話しいただきたい先生はたくさんいらっしゃいましたが、時間の関係上、限られた先生方のみになってしまいましたことをお詫びいたします。

VIII. 一般演題

コロナ関連演題、ディスカッション演題をはじめ多くの演題を登録いただきました。興味をもって視聴された先生が多かったと思います。



図2 学会参加記念品のCD

IX. その他

小林里美先生のご尽力で、PPP患者会の第1回目が開催されましたが大いに盛り上がっていました。また、本誌9月号がちょうど乾癬特集号でしたので、参加記念品として配布することにしました。ただ、すでに購読されている先生にはありがたくないでしょうから、もう1つ、これまで私自身が経験してきた中から、乾癬・掌蹠膿疱症の症例集を作成しました(図2)。とくに、現在乾癬や掌蹠膿疱症の外来を担当している先生方にお役立ていただけるものと思います。

おわりに

Web開催となった途端にテンションが下がってしまいました。招宴会、懇親会もなくなり、挨拶、食事、余興、等々準備しなくて済むので楽は楽なのですが、味気ない学会になりました。学会終了後も1カ月くらい視聴ができるようにしたいと考えており、そのつもりでしたが、直前にコンgress会社に

確認したところ準備が間に合わなかったといわれてしまいました。当日配信のみになってしまいました。ご視聴の先生におかれましてはお楽しみいただけたでしょうか。初日はアクセスが多くて回線が一時的にパンクする事態もおきてしまったようでした。事前に録音した一般演題は、非常に声を通して聞きやすい先生と、声がボソボソ籠ってしまい聞き取りにくい先生と、両方でした。今回、配信会社のスタッフが、学会コンgress会社のスタッフをはるかに凌ぐほどたくさん来ており、配信部屋には多くの機器が搬入されていました。もし何かあったときのために医局員数名に会場で待機してもらっていましたが、結局何もすることがなく途中で「帰っていいよ」となりました。誰か一人責任者がいればこういうWeb学会はできてしまうということがわかりました。

来年になれば学会開催がもと通りという見通しもいまだ立ちませんが、来年はなんとか盛大な会が現地開催できるようになっていることを望みます。